

週 報

こひつじ

第41巻 46号
 大津キリスト教会
 菊池郡大津町室 119
 TEL 096-293-4470
 FAX 096-293-4961
 牧師 米村 英二

種蒔きのたとえ

その二 福音の種を蒔く

ではどこから始めるか。
 まずは自分の心に、みことばの種を蒔くことから始めたい。たゆまず蒔き続けるなら、実りは必ずあるはずである。

木を植えることも同じだ。

内村鑑三に「木を植えよ」という文章がある。彼は言う。

「国を興さんと欲せば木を植えよ。末、植林に成功する。植林、これ建国である。山林は木材を供し、気候を緩和し、洪水を防止し、田野を肥やし、百利ありて一害なし」

そこで彼は、それを実行したデンマークについて語る。

デンマークは一八六四年にドイツとの戦争で敗れ、国土の大部分

を失った。そのときダルカスとい

うクリスチャンが立ち上がり、失望している国民に向かって呼びかけた。

「剣で失ったものを鋤で取り返そう」

彼はまず砂漠のようなユトランド半島に水を引き、大変な苦勞の

樹木が育つと、気候が穏やかになり、やがてその地は豊かな作物を

もたらす田園と化するのである。それがデンマークの今日の繁栄をつくったのだという。

種を蒔く。木を植える。どちらも

も、それがもたらす益は大きい。同様に、福音の種を蒔くことも

偉大な事業なのではないか。私は言いたい。

「国を興さんと思えば、福音の種を蒔け」と。

自分の人生を振り返って、何をもっとも感謝すべきことであるかと言え、だれかが私の心にみことばの種を蒔いてくれたことだ。

私を導いてくれたスプア宣教師は、一九五一年、二七歳のときカナダから熊本に来て伝道を開始した。八〇歳をすぎて天に召されたが、彼女の種まきで現存する教会は、熊本、植木、鹿本、高森、宮地、益城の各地にある。私もスプア宣教師によって種を蒔かれたことを思うと、大津の教会もその一つと言つてよいだろう。熊本県北部の小さな町々に教会があるのは、彼女が種を蒔いてくれたからである。

にもかかわらず、日本のクリスチャンの数は今なお全人口の１％に満たない。日本におけるキリスト教伝道は決して実り豊かなものであったとは言えないのである。

『近代日本の形成とキリスト教』の著者は、その結びでこう書いて

いる。

「日本の土壌は決して良い地ではなかった。日本のキリスト教はいわば『いばらの地に落ちた』種であり、『いばらが伸びて、ふさいで』

来たのである。それゆえ、九五年の昔（この本が書かれたのは六〇年前なので、今から百五十年前）

に宣教師ウィリアムズが自分たちの使命とした『石を掻き集め、荊棘を取り除き、これに鋤鋤を入れる準備をする』ことは、今日においてもまた日本のキリスト教会の基本的な課題の一つである」。

問題はどこにあるか。

イエスは土地にあると言われた。もし土地がよければ、つまり聞く人の心がよければ、三十倍、四十

倍の実を結ぶのである。フランチェスコに福音の種が蒔かれたとき、彼の人生は大きく変えられた。そればかりか今に至るまで、多くの人が彼の伝記を読ん

で人生の変革を迫られている。ルターの上に福音の種が蒔かれたとき、その影響は世界史を変え

るほどのものとなった。

さらに、あのピリグリム・ファ

ーザーズが福音の種を持ってアメリカに渡ったとき、アメリカの未来は定まったのである。イギリスの作家カーライルは言う。

次週（十一月三〇日）の礼拝

「二百年前、オランダのデルフト港からメイフラワー号が出帆したあの小さな事実を考えてみるがよい。わたくしどもはここに一篇の詩を、大自然がみずから歌った詩を見いだすことだろう。なんとなればそれがまさにアメリカの始まりだったのであるから。アメリカにはその前から移住民が散在した。しかしアメリカに精神を与えたのは、彼らであった」

○説教は米村牧師

先週の礼拝報告

○司会は林田実季さん。

○説教は、ルカー○章から、弟子たちを派遣するときのイエスの訓戒の続きで、「あいさつしてはならない。家から家を渡り歩いてはならない」の意味についてでした。

○礼拝参加者は六九名（男二五、女四四）、それに子どもが三名、合わせて七二名でした。

問題は何でもない。蒔く人でもない。土地である。（続）

今日の礼拝

○礼拝は午前一〇時半から。

○教会学校は午前一〇時半から。ロバート・フロストの「往かなかった道」という詩を紹介しました。

○説教は宮元隆博さん。

○礼拝後、昼食交わり会。

○米村牧師夫妻と尾頭誠郎さんは

ある日、森の中で、道が二つに分かれていました。当然のことながら、ひとりりで二つの道をゆくことはできません。彼はしばらくたずんで、それぞれの道を遠くまで見渡します。そしてつづやくようにこう言うのです

「最初の道は次の機会にとつておこう。もつともここに戻ってくることはもうないかもしれないけれど」

そして思います。

おそらくずっとずっとのちに、私は、ため息まじりにこう言うだろう。

昔々、ある森の中で道が二つに分かれていた。そのとき私は人があまり往かない道を選んだ。それが後の私の人生のすべてを変えたのだと。

○献金の感謝

私たちの教会には席上献金もなければ記名献金もありません。すべてはこの教会に所属してくださっている皆様の自発的・自由献金によって創立以来支えられ、しかも何一つ欠けることがありませんでした。皆様の尊い犠牲と忠実な信仰に感謝いたします。主の恵みが皆様の上にありますように。

この詩は、あまり人の往かない道を選んだことの後悔ともとれるし、いや、だからこそ今の自分があるのだという感謝にもとれます。その解釈は読者にゆだねられているのです。

五〇数年前、私にも二つの道が

ありました。そのとき迷いながら、大津に残る道を選びました。別の道を選んでいたら、別の人生があったでしょう。

しかし振り返ると、この道で、主は私の想像を超えてよいことをしてくださっていたのです。

みなさんにも「往かなかった道」があるでしょうか。

牧師のメールアドレス

yonemura@ja2.so-net.ne.jp